

聖書：エペソ人への手紙5章1～9節

説教：光の子どもとして歩む

はじめに

子どもの頃、周りの大人をじっと観察して、こういうときはこうする、こう言われたらこんなふう
に返事をする。そういう生活の基本的なことを周
りの大人から学んでいました。それから思春期を
迎えたとき傲慢だった私は、だれかを見倣って生
きるなどまっぴら御免。一回きりの人生は自分自
分で選択するのだと言って、他人の意見など聞こう
ともしない。そんな生き方をしていました。それで
どうなったかと言えば、結局あるとき破綻してしま
い、自分ではどうすることもできなくなって教会
に駆け込んだわけです。

いったい私たちはなにをモデルにして生きたらよ
いのか。それが今日のテーマになります。そこで
きょうは、三つのことを取り上げます。一つ目、だ
れをモデルとして生きるのか。二つ目、なぜ神がモ
デルとなるのか。三つ目、具体的にどんなことをす
ることなのか。

1 だれをモデルとするのか

1) 神に倣う者となりなさい

そこでまず一つ目、だれをモデルとするのか。
皆さんも経験があるかもしれません。何か困った
ことがあったら全部この人に聞けばよい。この人
の生き方を真似をすればすばらしい人生になるに
違いない。そんな人がいたりします。実際、世の中
には「あこがれのライフスタイルを貫いて輝いてい
る女性または男性」という方がいて、その人が書
いた本も売れるのだそうです。人をモデルとする
ということです。

聖書はなんと教えているか。1節。「ですから、
愛されている子どもらしく、神に倣う者となりな
さい。」いきなり結論です。人生のモデルは人では
なく、神であるということです。

2) なぜ神なのか？

しかし神に倣いなさいといきなり言われても、
おそらく多くの人とはまどうのではないでしょう
か。日本にはたくさんの神々がいるそうですが、
神を敬えということは聞いても、神に倣って生き
なさいというような教えられことはありません。
神に縛られるなんて時代遅れだ。人間は自由だ。
どうして聖書の神に倣うのか。そんなふうに反発を

するでしょう。その気持ちはよくわかります。私も
教会に来る前はそうに思っていました。

2 キリストの愛

1) 私たちのためにご自分を献げてくださった

そこでまず二つ目の疑問に移ります。どうして神
に倣うのか。もしも、「神は偉いから、とにかく
見倣うのだ」と頭ごなしに言われても納得はできな
いでしょう。聖書はなんとやっているか。1節に
は、私たちは神に愛されている子どもだから。だ
から神に倣う者となっていくのだと書いてありま
す。でも、「愛しています」というのは口だけなら
だれだって言えます。愛しているのならその証拠を
見せて欲しいということになる。聖書は拔かりあ
りません。2節にこうあります。「また、愛のう
ちに歩みなさい。キリストも私たちを愛して、私
たちのために、ご自分を神へのささげ物、またいけ
にえとし、芳ばしい香りを献げてくださいまし
た。」

神であるキリストは、旧約の時代に動物を屠
つて神にささげたように、ご自分のからだを神への
ささげ物として献げてくださった。そのようにして
愛を示してくださいました。

でも、これだけではよくわからない。たとえ
してはふさわしくないかもしれませんが、こうい
うことか。最近ストーカー事件ということを知りま
す。神が私たちを好きになり一緒に暮らそうと言
ってきた。けれども人間のほうは、神が嫌いであ
り逃げ回った。そのことを逆恨みした神は、「わたし
はあなたのために命を献げます」と言って勝手に死
んで、愛を押しつけたのか。もちろんそんなはず
はない。

2) 十字架に示された神の愛

話しが逆さまで、死ぬべきなのは実は私たちの
ほうでした。アダム以来罪あるものとして生まれ
た私たちのほうが、十字架でさばかれなければなら
なかった。それなのに、この方は私たちを救うた
めに進んで十字架におかかりなり、身代わりとな
って神のさばきを受けられました。「イエスとい
う男が勝手に十字架で死んで愛を押しつけた」の
ではありません。私たちが神である方を十字架で殺
してしまったのです。それなのに、この方は私
たちを責めることなく、進んで十字架の死を受け入

くださいました。こうして神はご自分の愛を十字架で示してくださいました。

よく誤解されることですが、私たちが悔い改めてよい子になったので、神が愛して下さった。そう受け取る方がいます。自分もこんなふうになれたり、したりしてきたので、無理もないことかもしれません。しかし神は違います。私たちがよいことをしたので、そのご褒美として愛して下さったのではない。むしろ、罪の生活にどっぷり浸り、好き放題をして、悔い改めもしないでいたとき、神はそんな私たちのためにいのちを捨ててくださいました。それで十字架に神の愛が示された。その十字架を見たとき、どれほど自分が神を苦しめていたのかを知らされ、悔い改め、だれから言われなくても神に倣って歩むようになります。

神に倣えと言われて、とても不自由でいやだ。最初はそう受けとめたかもしれません。よく見たらまったく違う。神に倣って歩むとは、実は本当に自由になっていくことではないかとさえ思うのです。このことはまたあとで触れると思います。

3 神が示してくださるモデル

1) ことば

次に三つ目の疑問、神に倣って歩むとは具体的にはどういうことかを見ます。3, 4節です。「あなたがたの間では、聖徒にふさわしく、淫らな行いも、どんな汚れも、また貪りも、口にすることさえしてはいけません。また、わいせつなことや、愚かなおしゃべり、下品な冗談もそうです。これらは、ふさわしくありません。むしろ、口にすべきは感謝のことばです。」前回見たところでも、隣人に真実を語りなさいと言われていました。ここでも行いのことは書かれてはいますが、それよりもことばのことを強調しているようです。どうしてだろうと考えます。そこで思い出すのはイエスがこう語ってくださったところです。「口から出るものは心から出て来ます。それが人を汚すのです。悪い考え、殺人、姦淫、淫らな行い、盗み、偽証、ののしりは、心から出て来るからです。」（マタイの福音書15章18, 19節）私たちはなにか善いことをするというとき、行いのことを真っ先に考え、何を語るかについてはほとんど考えない。ところがイエスは反対で、行いよりもことばを優先する。というのは、心のうちにあるものはことばとなって口から出てくるから。いくら行いで誤魔化そうとしたとしても、ことばだけは誤魔化すことができないということです。これは恐い話です。確かに自分のことを振り返れば、感謝のことばよりも、不平

や不満、怒り、いらだったことばが口から出てくることもある。ふだんは気をつけているつもりでも、とっさのときに自分が思いもしなかったことばが出て来て、後になってなんであんなことを言ったのかと落ち込むことさえあります。心にあるものは隠すことができません。

2) 闇から光へ

最初にも言ったように私はかつて、だれかからも制約を受けたくない、それが自由に生きることだと考えていました。それで生きる基準というものを自分で決めるのですが、都合が悪くなるとどうなるか。自分の都合よいように基準をころころ変えて誤魔化す。「あなたがたは以前は闇でしたが」と聖書に書かれているとおりです。自由だ自由だと言いながら、結局罪の奴隷になって不自由な状態のなかで苦しんでいたのです。

ところがキリストの十字架に出会い、闇の中に光をいただいたことにより、何が真理で何が義であるか、この方に生きる基準があることを知りました。こうして光の子として歩み出したわけですが、いつも光の子どもとしてふさわしく歩んでいるとはとうてい思えません。

3) 実を結ばせてくださる

9節に「光は実を結ぶ」とあります。とても「実」を結ぶ歩みだできていないと、がっかりする方もいるかもしれなし。そもそもいったい「実」とはなんでしょうか。なにか具体的な行いをして目に見える結果を出していく、そんなことを思い浮かべます。でもそういうことは書いていない。書いてあるのは、先ほど見たように「私たちの内側から出てくることば」のことでした。ということは、聖書が語る「実」というものも、内側から出て来るもの。私たちが変えられていくことによってその結果として、内側から生まれてくるもの。そう考えた方がふさわしいように思います。神に倣って歩むと聞いたとき、無理をしてでも真似ることかと思ってしまう。ところが実際には真似るのではなく、むしろ十字架で示してくださったキリストの愛を知ることにより、いつのまにか自然に変えられていく。自分ではほとんど気がつかないままいつの間にか実を結んでいくことではないでしょうか。私は光の子にふさわしくない者ですと告白していくこと、そうして自分の中にある暗闇を光の中に引きだしていくときに、神が実を結んでくださる。

このキリストとともに今週も歩んでまいります。